

博士論文「箏唄の作曲手法—古代歌曲の古楽譜の解釈と音律研究を起点として」

概要

本論の研究目的は、絃番号が記されたもっとも古い和琴歌譜である『琴歌譜』の《茲都歌》と《歌返》の解説を行い、得られた成果を創作に援用することである。『琴歌譜』を研究対象とする理由は、筆者の創作の主要編成である箏唄と類似した編成である最古の「琴歌」が、どのような音楽であったかを明らかにするためである。日本の歌謡の旋律様式を考察するにあたって、平均律を箏の音律に用いない筆者の創作においては、明治の洋楽導入以降に作曲されたピアノ伴奏による日本歌曲を参照することは無意味であるため、研究の起点として古代の歌謡を対象とした。研究篇では古代の琴歌の様相を明らかにすることを目的としているため、筆者は譜の解説において創作的な要素を意識的に排し、極力、史学的解釈に則って解説を試みた。ゆえに本論文は研究編と創作編を区分して論述する。

研究篇（第1章～第4章）では、古代歌曲の古楽譜の解釈をふまえ《茲都歌》と《歌返》の解説を行う。『琴歌譜』に所載された楽曲は宮廷儀式で歌われる日本古来の楽「大歌」であるが、大歌がどのような歌謡であったのかということはこれまで具体的に述べられてこなかった。『琴歌譜』の原本が成立した平安時代、律令制の展開とともに、唐楽や大陸の音楽はすでに頻繁に演奏されていたが、大歌はその影響を受けずに「日本古来の楽」を保持しつづけたという言説は、その根拠が示されることなく先行研究の前提とされている。しかし、「日本古来の楽」とは具体的に何を指しているのかは明言されていない。筆者は『琴歌譜』に記された序文から礼楽思想への憧憬を読み取り、先行研究とは異なる方法論で、絃番号が記された《茲都歌》と《歌返》の2曲の解説を試みる。研究篇の主たる目的は、解説結果に基づき歌謡の旋律様式を明らかにすることで、大歌という歌謡の一端を明らかにすることである。

本論の研究手法は現行演奏による御神楽や催馬楽を援用しないという点で先行研究とは異なっている。主として日本の研究者によっておこなわれてきた『琴歌譜』の先行研究では、現行演奏による御神楽や催馬楽を援用し、譜の解説や「再現」がなされてきた。しかし、『琴歌譜』の底本が成立したと考えられている平安時代の音楽様式が現行の演奏とは異なるものであるということは、おもに海外でおこなわれてきた先行研究によってすでに明らかにされている。その顕著な違いは時間の構成である。本論では平安時代の音楽様式における時間構成について考察し、《茲都歌》と《歌返》の拍とリズム

の推定にこれを応用する。

先行研究において、現行の演奏様式は和琴の調絃および奏法にも援用されている。その顕著な例が互い違いに音を配置する和琴の調絃である。この調絃は順搔、逆搔の奏法を想定しているといえるが、このような奏法の指示は『琴歌譜』には見当たらない。つまり、根拠はないものの調絃と奏法に現行の御神楽を参照しているに過ぎないのである。本論は『琴歌譜』の序文に立ち返り、調絃について記していると思われる一文を読み解き、互い違いの調絃ではなく音階順の調絃を用いた。その結果、先行研究とは異なる旋律があらわれた。その特徴のひとつが三和音による分散和音進行である。この三和音分散進行を古代音楽、および日本の伝統的な音楽の中に見出すことはきわめて困難であるが、琵琶の秘曲《流泉》を類似例として参照し、特権階級の人々にこのような音の響きが特別な意味をもって受容されていた可能性を示した。

譜を解読した結果、《茲都歌》と《歌返》は当時としては先進的な唐楽の音楽語法を用いながらも、宮廷儀式に用いられるという大歌の性格上、とくに古風で由緒ある歌詞を用いたものであるという結論に至った。つまり、大歌の一般的な定義である「外来の音楽に対して日本古来の音楽」が意味する「日本古来の」という要素は、《茲都歌》と《歌返》においては音楽様式ではなく、歌詞の性格に由来すると筆者は考える。本論の解読結果は『琴歌譜』の序文に記載された礼楽思想、および「音楽」の定義に合致するものであることを実証した。

創作篇（第5、6章）では、筆者の創作の主題である複数の音律を合成する手法、および箏唄と5人の奏者のための《未言》の^{みこと}作曲手法について詳述する。筆者の創作の基調音であるエンハーモニク（古代ギリシアの音楽理論に由来するおよそ四分音にあたる音程）の響きについて過去の作品を参照しながら概説し、このエンハーモニクを含む複数の純正調の音律を合成する手法を提示する。

音律を主題とする作品の創作の過程で筆者はいくつかの問題に行き当たった。それは音律を精確に演奏するための楽器の選定、および他の楽器との響きの調和である。筆者はこれらの問題点について、実践的な考察にもとづき、現時点で妥当だと思われる手段を提示する。それは、細かな音高の設定が可能である箏を編成の主とすることと、他の楽器には自然倍音が多く含まれるもの、たとえば金属打楽器や、低弦楽器のハーモニクス奏法を組み合わせる手法である。箏以外の楽器の響きは、筆者の合成音律とは厳密には一致しないものの、箏の作る音律との響きの齟齬を自然倍音によって緩和させることを企図している。

筆者の創作における今後の課題は、日本語の詩をどのように音律の抑揚とともに旋律化するかということである。音律にはそれぞれ独特の抑揚があり、それを生かした旋律を定型化するためには引き続き考察が必要である。

研究における今後の課題は、日本の歌謡の持つ旋律の特性とは何か、外来の音楽が流入したときにどのような影響を受けるのかを考察することである。これらの研究課題は、筆者の創作における根本的な主題とつねに一致している。本論では『琴歌譜』における《茲都歌》と《歌返》をもとに旋律の特性を詳述したが、それは日本の歌謡が持つ多様性のひとつの側面にすぎない。古代中世の歌謡で旋律がどのような特徴を持ち、歌われていたかということについて引き続き研究を行い、創作との交点を模索したい。本論文はその起点となるものである。